2018年6月14日 セミナー@立教大学

ゆがんだ宇宙の大規模構造: 宇宙論の新しいプローブ

樽家篤史

Atsushi Taruya

京都大学 基礎物理学研究所 (Kyoto Univ. Yukawa Institute for Theoretical Physics)



観測される宇宙の大規模構造に現れる「ゆがみ」を 用いた宇宙論、その新しい様相

大規模構造の観測

赤方偏移空間ゆがみ

相対論的ゆがみ

まとめ

宇宙の大規模構造

数<u>ギガパーセク</u>に渡って広がる質量分布の空間非一様性

3*10^9 light years

コールドダークマターに占められている (インフレーション時に生成) 原始密度ゆらぎが宇宙膨張下で重力不安定性により成長

・豊富な宇宙論情報を有している
・ポスト・プランク衛星の精密宇宙論研究を担う

加速膨張の性質・正体、宇宙のダークセクターの解明、



大規模構造を観測する

望遠鏡を占有して銀河の地図を作成





Very Large Telescope (チリ)





Blanco telescope @ CTIO (チリ)



https://en.wikipedia.org/wiki/Very_Large_Telescope http://www.sdss.org/instruments/ http://subarutelescope.org/Information/Download/DImage/index.html http://www.cfht.hawaii.edu/en/news/CFHT30/#wallpaper http://www.darkenergysurvey.org/DECam/index.shtml

S.6m

Canada-France-Hawaii Telescope (ハワイ)

4m



大論争(1920年)



H. Shapley & H. Curtis

を知ることが不可欠

渦巻き星雲(天の川銀河)の正体と宇宙の大きさについて の公開討論会

> 天の川銀河は我々が知りうる宇宙の全て (アンドロメダ銀河は我々銀河の一部)



Shapley

アンドロメダや他の "星雲" は遠方の銀河、

もしくは"島宇宙"

問題の解決に

M3I (アンドロメダ) wikipedia

(宇宙論では非自明な問題)

距離(指標)



大規模構造の3次元構造を知る手がかり

宇宙膨張により 遠方の銀河は近傍銀河に比べて「赤く」見える



銀河ーサベイ観測の黎明

CfA 銀河赤方偏移サーベイ



de Lapparant, Geller & Huchra ('86)

Las Campanas 赤方偏移サーベイ Shectmann et al. ('96)







http://www.sdss.org/press-releases/astronomers-map-a-recordbreaking-1-2-million-galaxies-to-study-the-properties-of-dark-energy/

バリオン音響振動(BAO) ・原始バリオン・光子流体の音響振動スケール (~I50Mpc) (⇔ CMBの音響ピークのスケール) ・標準ものさしとして遠方銀河までの距離測定に使える (理論プライヤー) →加速膨張のプローブ



幾何学的ゆがみ

BAOの潜在的能力を引き出す鍵

仮定した宇宙モデルがミスマッチしていると共動座標系の銀河分布 が見かけ上ゆがむ(アルコック-パチンスキー効果)

→ 統計的な等方性が見かけ上破れる



BAOを標準ものさしとして使えば H(z) & DA(z) を銀河分布から同時に測定できる

BAOを使った宇宙論的距離の制限 宇宙論的な距離は、宇宙膨張のパラメータに依存 → 加速膨張の精密診断に使える



Alam et al. ('16)

赤方偏移空間ゆがみ

(Redshift-space distortions, RSD)

(2点)相関関数 = 銀河のペアをカウント → 特徴的な非等方性



赤方偏移空間ゆがみ

(Redshift-space distortions, RSD)

(2点)相関関数 = 銀河のペアをカウント → 特徴的な非等方性



非等方性の起源

銀河の(視線方向の)特異速度場の影響が混入 (ドップラー効果) (赤方偏移は距離指標として完璧ではない)



ハッブルダイアグラムに見られるバラツキの原因 2点相関関数・パワースペクトルでは系統的効果として効く



観測者が定義する空間は'実際'の空間とは違う

特殊相対論の最低次の効果 (i.e., $v/c \ll 1$)

赤方偏移空間 (共動系) $\vec{s} = \vec{r} + \frac{1+z}{H(z)} (\vec{v} \cdot \hat{z}) \hat{z}$ 実空間

観測者の視線方向



RSDは銀河のクラスタリング統計の解釈を複雑にする...

カイザー公式
赤方偏移空間
の密度場

$$\delta^{(S)}(s) = \left|\frac{\partial s}{\partial x}\right|^{-1} \{1+\delta(s)\} - 1$$

 $(1+\epsilon)(s)\} - 1$
 $(1+\epsilon)(s)$
 $(1+\epsilon)(s$

重力のプローブ

カイザー 公式 $\delta^{(S)}(\mathbf{k}) = (1 + \mathbf{f} \mu_k^2) \,\delta(\mathbf{k}) ; \quad f \equiv \frac{d \ln D_+}{d \ln a} \,\lambda \tau - \mu$ 因子

構造の成長率は重力の性質によって変わりうる

しかも

カイザー公式は重力理論とは無関係に成り立つ

宇宙論的大スケールで重力理論(相対論)を検証する手段
 •ACDMモデルの中で未だ検証されていない仮定
 •加速膨張の起源に迫る手がかり

e.g., Linder ('08); Guzzo et al. ('08); Yamamoto et al. ('08); Percival & White ('09)

宇宙論的大スケールにおける重力 _{銀河 銀河団 銀河のクラスタリング CMB}

マケール

(~Gpc)

スカラー自由度による

第5の力の発現

加速膨張

高密度

小スケール (~kpc)

ー般相対論を再現 (重力スクリーニング)

Dark energy accelerated expansion

修正重力を記述する理論的枠組みは十分すぎるほど発展した: f(R)重力、DGP、ホルンデスキー、ビヨンドホルンデスキー...

構造形成の修正





最近のデータ(BOSS DRI2)でも新しいRSD公式が使われたが、相 対論からの有意なずれは見つかっていない (Beutler, Seo, Saito_et al. 'I6)

高赤方偏移での制限



z~l.4 で2800個の輝線銀河を用いた

RSD観測(線形理論でよくフィット)





Okumura et al. ('16)

Upcoming/on-going projects

Multi-purpose ground- & space-based experiments

DES (2013~)



HETDEX (2016+)







DESI (2018+)



WFIRST

(2024++)



LSST (2022++)

eBOSS (2014~) Euclid (2020)







相対論的ゆがみ

大規模銀河サーベイによる高精度統計データは、 従来不可能だった新しい相対論効果の検出を可能にする (かもしれない)

従来の赤方偏移空間ゆがみに加え、





横ドップラー効果 重力赤方偏移効果 積分ザックス-ヴォルフェ効果 弱重力レンズ効果 光円錐効果

シャピロ時間遅延効果



Yoo, Fitzpatrick & Zaldarriaga ('09); McDonald ('09);Yoo ('10), Challinor & Lewis ('11); Bonvin & Durrer ('11)

http://www.roe.ac.uk/~heymans/website_images/



摂動入りのフリードマン宇宙における光の経路を考える:

 $ds^{2} = \left[-(1 + 2\Psi/c^{2})(c\,dt)^{2} + a^{2}(t)(1 + 2\Phi/c^{2})\delta_{ij}dx^{i}dx^{j} \right]$

天体から観測者までを結ぶ光の測地線を解く:

Null geodesic:
$$\frac{dk^a}{d\lambda} + \Gamma^a_{bc}k^bk^c = 0$$
 $k^ak_a = 0$ $k^a = \frac{dx^a}{d\lambda}$

Redshift :
$$1 + z = \frac{(k_a u^a)_S}{(k_a u^a)_O}$$
 u^a Observer/source's
4-velocity

(相対論的) 赤方偏移空間

E.g., Challinor & Lewis ('11)

(光で見た) 観測者からの銀河の位置

$$s = x + n \left\{ \frac{c}{H} \delta z - \frac{1}{c^2} \int_0^{\chi(z_{obs})} d\chi'(\Psi - \Phi) \right\} - \chi(z_{obs}) \alpha$$

シャピロ時間遅延

n:視線方向(単位ベクトル)X:共動距離







For rest-frame observer

殊・一般相対論的な光のエネルギーシフト

$$z = z_{obs} - \delta z$$
; 横ドップラー
 $\delta z = (1 + z_{obs}) \left\{ \frac{n \cdot v_s}{c} + \frac{\Psi_s}{c^2} + \frac{1}{2} \frac{v_s^2}{c^2} - \frac{1}{c^2} \int_{t_s}^{t_o} dt'(\dot{\Psi} - \dot{\Phi}) \right\}$
standard RSD
(古典ドップラー) 重力赤方偏移 積分ザックス-ヴォルフェ

オーダー評(

効果	$\frac{\delta z}{1+z}$	[km/s]
Standard RSD (古典ドップラー)	O(>10-3)	O(> 0 ²)
重力赤方偏移	O(10 ⁻⁵)	O(I)
横ドップラー	O(10-5)	O(I)
積分ザックス - ヴォルフェ	O(<10-5)	O(<i)< th=""></i)<>
		e.g., Cai et al. ('16); Sakuma et al. ('17

重力レンズの曲がり角 O(10-3) rad ~ O(1) arcmin (コヒーレンス: few deg or ell~100) シャピロ時間遅延 O(1) Mpc (コヒーレンス: 100 deg or ell~2)

e.g., Hu & Cooray ('01); Lewis & Challinor ('06)

相対論的ゆがみのシミュレーション

M-A. Breton, Y. Rasera, AT, O. Lacombe & S. Saga arXiv:1803.04294

標準的なN体コード(RAMSES)から

> ダークマター・ハロー分布のスナップショット

- •光円錐上の重力ポテンシャルデータを保存
- ・光の測地線方程式を観測者から天体(ハロー)に向けて逆解きする(ただし $\Phi = \Psi$ を仮定) http://www.projet-
- → ゆがんだ天球面の位置 & 赤方偏移: $1+z = \frac{(g_{\mu\nu}k^{\mu}u^{\nu})_{s}}{(g_{\mu\nu}k^{\mu}u^{\nu})_{o}}$ 相対論的効果全てが入る

 k^{μ} :null 4-vector u^{μ} :observer's or source's 4-vector





Reconstructed liaht-co

imulation box

density_full_realspace

ボックスサイズ 656Mpc/h の結果 (z=0.04-0.1)



density_full_redshiftspacealleffects



density_zoom2_realspace



Value/ Color

density_RSDonly



density_allrelativisticeffects



差分をとった時の相対的寄与



観測される密度ゆらぎ:線形理論

相対論的な線形摂動論 e.g., Bonvin & Durrer ('11) 従来の RSD (カイザー効果) magnification bias ignored $\Delta(\mathbf{n}, z) = b \,\delta - 2\Phi + \Psi - \left(\frac{1}{\mathcal{H}}\partial_r(\mathbf{n}\cdot\mathbf{v})\right) - \left(\frac{2}{r\mathcal{H}} + \frac{\dot{\mathcal{H}}}{\mathcal{H}^2}\right)\mathbf{n}\cdot\mathbf{v} + \frac{\dot{\Phi}}{\mathcal{H}} + \frac{1}{\mathcal{H}}\left(\partial_r\Psi + \mathcal{H}\mathbf{n}\cdot\mathbf{v} + \mathbf{n}\cdot\dot{\mathbf{v}}\right) + \frac{1}{r}\int_0^r dr'[2 - \frac{r - r'}{r'}\Delta_\Omega](\Phi + \Psi) + \left(\frac{2}{r\mathcal{H}} + \frac{\dot{\mathcal{H}}}{\mathcal{H}^2}\right)\left(\Psi + \int_0^r(\dot{\Psi} + \dot{\Phi})dr'\right).$

 δ :共動ゲージにおける密度ゆらぎ

相関関数に双極子的 非対称性

n:(広角度)視線方向

(`):共形時間微分

双極子的非等方性の一部は相対論的効果によって生み出される (i.e., 重力赤方偏移)

相関関数の双極子非対称性 異なる質量同士のハローの相関関数 (質量:4.5x10¹³&2.6x10¹²M_{sun}/h) (5,400,000個) (400,000個)



- 4096^3 個のダークマ ター粒子
 - 2.625 Gpc/h ボックス (z<0.46)

RayGalGroupSims (will be public)





双極子非等方性: 詳細(2) 小スケール

相関関数の双極子非等方性・2

異なる質量同士のハローの相関関数 (質量:4.5x10¹³&2.6x10¹² M_{sun}/h)





まとめ

宇宙の大規模構造観測に現れる「ゆがみ」を使った宇宙論 の進展と新たな様相:相対論的ゆがみ

赤方偏移空間ゆがみ:銀河の特異速度場によって生じる銀河の

クラスタリングの非等方性 → ゆらぎの重力的成長のプローブ

• 一般相対論の整合性の検証

• 修正重力理論に対する制限

相対論的ゆがみ:相対論的効果による新たな効果→新しい宇 宙論のプローブ

•相対論的観測効果を入れたシミュレーション

•相関関数に現れる非対称性(双極子成分)